



トンガ王国に駐在して



沼田 行雄

前駐在トンガ王国特命全権大使

2017年12月7日

日本の南東約8,000キロ、大洋州島嶼諸国の最南端に位置するトンガ王国は、総面積は対馬と同じくらいで、本土の人口も約10万人の小さな島国ではあるが、大洋州地域唯一の王国として我が國皇室との関係が深く、古くは武藏丸など相撲力士、近年はアマナキ・マフィ選手を始め全日本で活躍する多くのトンガ出身ラグビー選手を通じて、日本でも知る人ぞ知る親日国である。また、1970年代に先々代トウポウ4世が導入した、そろばんや日本語教育が教育制度として定着していることや、少數ながら第一次世界大戦後に移住した日本人の子孫たちの活躍などもあり、両国民間には長年に亘り温かな人々の交流が続き深い友情で結ばれている。そうしたトンガ王国に約二年半在勤したところ、印象に残る思い出と今後に向けた願いを記したい。トンガの人々の笑顔と温かな人情に触れ、日本とトンガとの友好関係を深めることに少しでも貢献できたとすれば、これに勝る幸運はない。

私の着任直後、2015年7月4日にトウポウ6世国王陛下の戴冠式があり、国王陛下の御招待に応え、我が国から皇太子同妃両殿下がお揃いで参列され、國を挙げての大歓迎を受けられた。両殿下は3日から6日まで滞在され、皇太子殿下にとって3回目のトンガ御訪問、雅子妃殿下にとっては2013年以来の外国訪問であった。

皇太子殿下は、公式晩餐会を始めとする一連の関連行事全てに参加された他、トンガで活躍する青年及びシニア海外協力隊員を御接見、また、最終日には両殿下ご一緒に、在留邦人、日系人代表だけでなく、在日トンガコ

ミュニティ代表のラグビー関係者も御引見され、一人一人にお声をかけ激励されたことが印象に残る。

この御訪問については、日本ではその模様がTV、新聞、雑誌等を通じ120回近くも報じられと聞いており、トンガでも、雅子妃殿下のお優しい微笑みや日本のマスコミの関心の高さを伝えるなど非常に好意的な反応があり、双方でその知名度を高める機会にもなった。

こうした素晴らしいスタートを切った御縁もあり、その後、ウルカララ皇太子シナイタカラ同妃両殿下には親しく接して頂き、大使館主催の各種文化事業では、国際交流基金の巡回展「手仕事のかたち」、同基金が日本写真家協会と共に企画写真展「日本の海岸線をいく」、今年の「日本料理レクチャー・デモンストレーション」などに主賓としてご臨席くださいり、事業の成功に貢献頂いた。

次に、印象に残ることは、トンガと日本との絆が、様々な人々の交流を通じて一層強まつたことである。両殿下がご訪問を終えてのご感想の中で、両国民間の温かい交流が積み重ねられてきていると言及されているように、両国の友好関係は、JICAボランティアの活動を始めとする草の根レベルの交流に多く根ざすものである。JICAは、1973年にトンガへのJOCV派遣を開始以来、50年近く継続的に約500名を派遣、現在もSVを含め年平均25名程度が国内各地で活動している。特に、日本語とそろばん教育は重要な柱で、日本語は、中等教育課程で正規の外国語選択履修科目に認定され、現在、公立4校と私立3校の計7高校で日本語の授業が行われ



高知県黒潮町による
ランドセル寄贈事業（ムア小学校）



在外公館文化事業そろばん全国大会



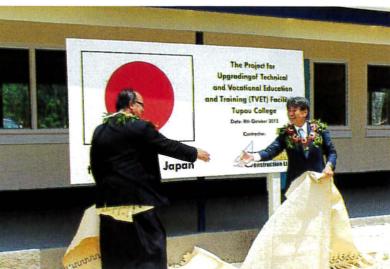
ファラハ村給水施設整備計画



国内輸送船用埠頭整備計画視察



マアマロア幼稚園バオロロア分園



トウポウ・カレッジ技術科教室整備

ている。そろばんも着実に全国に普及し、2011年には、政府の新指導要領に基づき公立小学校での必修科目となり、毎日15分間の授業が義務づけられている。

こうした交流にはJICAのみならず、民間や地方自治体も関与しており、そろばん普及については、NPO法人「国際珠算普及基金」の献身的支援や兵庫県小野市による中古そろばんの寄贈事業などが支えになっている。

最近では、ラグビーなどスポーツ交流も活発で、多くのトンガ人青年が日本の高校や大学にラグビー留学し、第一線のプロ選手に成長、ナショナルチームの一員としても活躍しており、また、神奈川県ラグビーフットボール協会による中古ラグビーボールの寄贈事業など、民間レベルでの交流も進んでいる。2019年のラグビーワールドカップ・日本へのトンガ出場も決まり、事前キャンプの誘致も始まっており、トンガとのスポーツ分野での交流の一層の活性化が期待される。

ユニークな協力としては、2016年の第一回「世界津波の日」高校生サミットの会場となった高知県黒潮町の大西町長が、今年5月、自民党二階幹事長とともにトンガを訪問し、地元の小学生達から集めた中古ランドセルをトンガの小学生達に寄贈する事業を開始した。沖縄で開催された今年のサミットにも、トンガから高校生6人が参加しており、津波を縁に交流の輪が広がっている。この他、科学技術振興機構の交流事業「さくらサイエンスプラン」に昨年からトンガも継続的に参加しており、また、30年以上トンガから小学生4名をサマーキャンプで受け入れているNPO法人「アジア太平洋こども会議・イン福岡」から、昨年8月には日本の中高生13人がトンガを訪れ、ホームステイなどを通じて現地の人々と交流した。更に、今年1月の内閣府「世界青年の船」事業に、約10年ぶりにトンガから12名が参加し、世界11カ国の青年と交流しており、こうした多彩な交流の積み重ねが進んでいることは嬉しい限りである。

対トンガ開発援助の主流である無償資金協力についても、着任直後の2015年5月に、我が国の優れた系統安定化技術を駆使した施設として、太陽光発電システム（出力1MW）と蓄電設備などマイクログリッド制御システムを併設するMATA'OE LA'A（マタオエラ太陽光発電所（15.7億円）の引渡し式があり、昨年4月に、国王王妃両陛下のご臨席を得て起工式を挙行した首都トンガタブ「国内輸送船用埠頭改善計画」（33億円）も、工事関係者の地道で誠実な努力で、順調に工事が進行しており、明年初の引渡しに向けて最終段階にある。同事業は、我が国と同じく生存の多くを海に依存するトンガの人々が、より安全で快適な生活を送れるよう2本の専用バースや乗客ターミナルなど国内船舶用の港内港湾施設を整備するもので、完成後は、大洋州地域で最も美しい港の一つになると信じている。

更に、今年5月には、その後続案件として、「風力発電システム整備計画」（21億円）実施にかかる交換公文の署名に臨んだ。同事業は、我が国の無償資金協力事業としては初の風力発電システム整備であり、前述の太陽光発電事業とともに、2020年までに50%の再生可能エネルギー化達成を掲げるトンガのエネルギー政策を強力に支援するものである。

この他、草の根・人間の安全保障無償資金協力も、年平均6-7件のペースで活発に展開しており、トンガタブ本島のみならず、最北端のニウアトプタブから、ババウ、ハーパイ、エウアなどの離島部でも、学校施設の建設・整備など教育分野を中心に、給水施設、病院整備、製氷機や小型船舶の供与など、人々の生活に密着した様々な分野で、地元コミュニティと一緒に協力を行ない、供与式では各地で熱烈な歓迎を受けたことが忘れられない。これからも日本とトンガとの友好関係が発展し、友情の絆が一層太く強固なものとなることを願ってやまない。